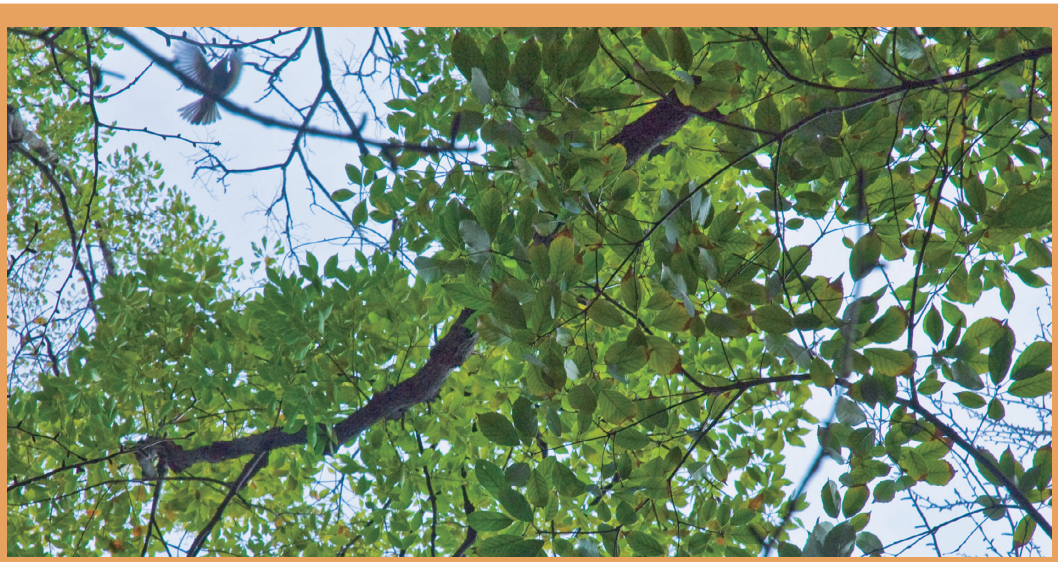

早春の公園、木々の間を飛び交うヒヨドリ（大阪市中央区・靭公園）

編集後記
From Editor

町なかの原っぱや近所の神社の境内は、昔は子どもたちにとって絶好の遊び場所だった。私も幼い頃、神社の森でセミ捕りをし、池でザリガニを捕まえたことなどを思い出す。草むらの中でバッタやトンボを追い、突然出てきたカエルやヘビに驚きもした。やはり生きものの存在を体で感じる体験は、現在でも子どもたちの成長にとって不可欠のものだと思われる。

今回の特集テーマは生物の多様性。人間にとり有益なのか有害なのかはさておいて、どちらでもない大多数の生きものを含めた多様性そのものが、地域の生態系を支えている。そして大きくは地球全体の環境にもかかわってくる。

それは生命の織りなす宇宙。岩槻邦男氏が言うように、「生物多様性は、人である自分から見て外側にあるのではなくて、自分自身がその中に含まれている実体」でもあるだろう。だからこそ「自分自身の生をどのように展開しようとするのか」という課題ともつながってくる。

経済効率や利便性を求め画一化が進められてきた現在の都市環境。その中で、今後求められてくるのは、きっと環境の多様性であるだろう。都市の中でも、コンクリートではなく土のある場所や循環する水、連携性をもった緑地など、環境づくりをする際にも生物多様性のモノサシが不可欠のものになる。

同時に、衣食住の生活すべてにわたって生物資源に依存している私たちは、持続可能な形での資源の活用を意識していかなければならない。その意味でも、生物多様性の問題は、これからますます私たちの暮らしの全般に大きく関わってくるものとなるだろう。企業の活動においても、生物多様性保全に力を注ぐことが当然のように要請されてくる。とはいえ、そこには特効薬はない。自然の力に頼りながら、一歩ずつ進めていくしかない。

何より私たち自身が、日々の暮らしの中でいのちのつながりを感じとることが大切になってくる。中村桂子氏は、図鑑をもって外に出て、生きものの名前をまず覚えようと言う。奥本大三郎氏も、身の回りに少しずつでも土のある場所をつくり、できれば在来の草花や木を植えようと提案する。そうすれば、季節がめぐるごとに、セミが鳴き、チョウやトンボが舞い、鳥たちもやってくる。

今秋、名古屋で開催される生物多様性条約第10回締約国会議が、私たちの意識の変革にとって大きな一歩となることを期待したい。　――京　雅也

表紙写真　「ラムサール条約」湿地に伊豆沼とともに登録されている内沼にやってきた一群のカモたち（宮城県）／宮城県蕪栗沼周辺の「ふゆみずたんぼ」で餌を食べるハクチョウの群れ／「ふゆみずたんぼ」のトロトロになっている土を見せ、その肥沃さを説明してくれる「日本雁を保護する会」会長の呉地正行氏

裏表紙写真　「いのちをつなぐ食育の会」の食育教室では、野草を摘んでその日の料理などに使う／ジャージー種の牛が森林の中で自由放牧されている「森林ノ牧場 那須」／初夏6月、ハスの花にとまるノシメトンボ（写真提供：呉地正行氏）

CEL 92号　特集 ■ 日々の暮らしから考える生物多様性　発行●平成22年3月26日　頒価1,000円（送料別途）

■発　行　大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所（CEL）
〒541-0046　大阪市中央区平野町4-1-2
■発行人　多木秀雄 *Hideo Taki*
■編集人　京　雅也 *Masaya Kyo* / 弘本由香里 *Yukari Hiromoto*

編集●関西ビジネスインフォメーション(株)内　CEL編集室
〒530-0005　大阪市北区中之島3-2-18
住友中之島ビル7F　TEL.06-4803-2307

印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2010 OSAKA GAS CO.,LTD.

禁無断転載複写
※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌・バックナンバーのコンテンツやエネルギー・文化研究所（CEL）の活動内容はインターネットホームページ〔http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/〕でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は　CEL編集室　Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで